



石川雅望の自書元本

石川雅望自書元本
其謄見本書中

15
1295



古川形行
維新の志士
三つ折のり
松尾の志士
中江の志士
母の志士
歌ヨミナリ

古川氏文記
昭和九年十月三日



○卷一 目次

- 第一 公使の訓
- 第二 武候彈琴
- 第三 額方持者
- 第四 うらを
- 第五 武候彈琴
- 第六 源語非教裁
- 第七 誹諧
- 第九 六位共々
- 第十 其起る沈の笛
- 第十一 蓮せの巻 月たらの
- 第十二 あに死を
- 第十三 こぼ
- 第十四 十二支名
- 第十五 玉葉の舞
- 第十六 梅場の巻
- 第十七 奇よみ
- 第十八 寸竹の川
- 第十九 寺き小柳
- 第二十 寺光推更傳説
- 第二十一 いちばん 五つ
- 第二十二 女 おき
- 第二十三 吹皮
- 第二十四 ちんち
- 第二十五 花 おき
- 第二十六 千字文
- 第二十七 仲麻呂のうら
- 第二十八 孔壁巻経
- 第二十九 千字文
- 第三十 いうた
- 第三十一 浄
- 第三十二 水湖傳
- 第三十三 春海連巻
- 第三十四 知し
- 第三十五 春海連巻



昭和九年十月三日

廿九 依与美

廿九 未掲記
石の石

廿七 孔丘

廿八 推年
うねるくわいじ

○卷二

第一 上丁路

第一 層氣樓

第二 上丁路

第六 酒池

第七 東路の記

第八 東園銀行

第九 塔の石

第十 寺の石の神

十一 神鈴

十二 松浦佐用姫

十三 古今集序

十四 経文之神

十五 燈籠の石

十六 ゆくまの川

十七 郡郭盧生

十八 いまの石

十九 監臨の唐

二十 関清水の石

廿一 入唐

廿二 拍子木

廿三 五柳先生

廿四 石の石

廿五 接骨法

廿六 石の石

廿七 めし石

廿八 辛去海の石

廿九 石の石

三十 古書石

廿一 依名石

廿二 章石

廿三 造酒令

廿四 佛書音

廿五 不忍池

廿六 甜石

廿七 金剛子

廿八 豊浦寺

廿九 相違石

三十 石の石

廿一 石の石

卅二 花石

卅三 王安石

卅四 教書の石

卅五 以平加額

卅六 石の石

卅七 大豆餅

卅八 俵字

卅九 石の石

五十 石の石

五一 甜石

五二 石の石

五三 石の石

五四 石の石

五五 石の石

○卷三

第一 石の石

第一 廿四序

第二 石の石

第二 石の石

第二 揚名序

第三 石の石

第三 石の石

第三 石の石

第三 石の石

第三 石の石

第三 石の石

第三 石の石

第三 石の石

第三 石の石

第三 石の石

第三 石の石

第三 石の石

第三 石の石

第三 石の石

第三 石の石

第三 石の石

第三 石の石

第三 石の石

第三 石の石

任那ノ任氏ニノ為九月二十六日ノ
御間敷ノ事ニ由テ任那ノ始ヲ其夜也ニ
曰ク此ノ事ハ主クニト云ル也

シクニシテ

今按ずるにこの説はしるしありあらず似たり
得るより一姓氏ハ國々ニハクハテおほく
の人の子孫ニハクハテおほくありて
いふにこれハしるしありあらずおほくは氏
の稱呼をさくハクハテしるしありあらず
いふにこれハしるしありあらずおほくは氏
郡丹生ハル布と云ふこと勿論あり
筑前系上座郡壬生をル布と注せし
未とルと云ふことありあらず
新恒集の詞をよみてありとも今

ハハあやまりのこおほくハクハテしるしあり
といふこと今考ふるに拾芥抄中或書
云延暦十二年正月甲午遣使於山背
國葛野宇太村地為遷都也始造山背
新宮同年六月庚午令諸國造新宮
諸門尾張美濃二國造殷富門伊
福部氏也越前國造美福門壬生氏也
若狹越中二國造安嘉門海犬甘氏
也丹波國造律監門猪養氏也但馬
國造藻壁門佐伯氏也拾芥抄今本誤抄
同書中未詳門號起
舎考しこの拾芥抄はひけり

やさぶせを古書なる一—今の山城の京あり
都ろろ一—つる内國はおほせを御門を
つくろ一—あまひさるるつる人の氏を
りて佳きまかて門號とある一—あひらま
るむこはは災福つをつくる人の氏士
生るれをまをを布とよむ一—たか
あきくらるる一—

二
いせおのり拾穂抄は古注を以ていせり
てあひら一—ををあひらとをいひつ
よんハ隆子ルリ十といひつよつを十四年と
いせおのりも只四十年おそひるる

いせおのり一—のあまをいせおと推すあり
ととととと

今安あするよ十四年のかこよきかよし
晴野日記は道徳の母の道徳のまを
このと一—かきくまあまかくて人ぶらぬ
さあそとをいひていひらふらつもの
一—ハあまりにいりてありいせおのりま
るせ一—もとととと

物とゆふさうきさ

此水を祖孫翁の延壽式をひきまそそりら
ししいとさうりこ万葉の浦島つきの歌ハ
人の志る命あり今梅さるる類聚三代
格才下太政官府定準犯科被事一
大被料物二十八種馬一匹大刀二口之
酒六斗米六斗稻六束 麩六斤堅魚六
斤之ささうら厚物河國ゆりの事さ
あけそえいらくをつけやきのあそひと
あり賦役令の煮塩年魚四斗煮堅
魚二十五斤 堅魚煎汁四升 註し謂

熟煮汁日煎と志りたり儀さとしら
物さうり煮堅魚といまの事煮つるをさ
るさうり三代格と志るさハ味と志る
をいさうら厚はまんこハささうらあや
いつれもいさうより貴さのこまよ調
物さうりあさうけしす原念の海
うきたるはけらのくはるささうら
いと山家集といさささうらさうら
ささうらささうらささうら
ハ堅魚と志るをつたへ人もさうら
いさうらよたけをさせー物さうら

有ける

五
演義三國志九十五回上武侯彈琴退仲達ことと志るせり

これよく人の志はるるを尋ねるる陳壽の三國志のいふ事こそを稗史をつくるものゆへにそりしとあり天録の外史といふ黃憲字叔度有巨盜攻真阮之關一郡大恐居氏遁逃而無所歸賊有司馬龍者力敵三軍勇冠百萬懸千錢千百步之外箭九發而九破以此檀譽時羣盜將陷關司馬龍曰吾關郡有黃叔

六
度未可致也乃結營於關外之之徵君鼓琴帳中司馬龍聞之笑曰此必叔度作困態也吾知其弱矣遂攻關門賊衆曰關不擊柝而鼓琴此詐也內必有伏且勿致之云叔度曰之云賊將の姓を司馬とくすより仲達のこととさす孔明のたそりのふらさきをしそんとてあはぬことをつたはるるゆゑある人ありけり
市井のあひする主人をさして親方といふあり
あけ本をの巻に例のうらうらなる心さるる

○まは物説の
 原は清く世に
 来たるれを
 亦昔の事と
 らあ今ハ向
 とくめむなり

物たりをせしむる人々も一々くはれる事
 にもやがたるる事とて言ふ。又曾我物語は
 三浦別當の妻ハ曾我十郎の妻ハ妹
 有りりりり別當の妻ハつひつひと
 いた女を十郎の妻とやらむとて志らく
 の事かいらふ候よしを親のよしと
 有りかひせらるることありといは後もし
 すうけくはらぬといふ事ある事あり
 兄伯母の事とて親をよとて親を
 此の事者ゆゑ親の事とて言ふに
 転じてまゝ人にも言ひまゝに
 なる事

源氏物語の注者の詞は凡四書五經ハ人の
 よとほくして仁義の道に入つていもんや女
 房と子の事あるも益ありされは人の
 耳にちりく又人の好むの淫風を中道
 善道の媒として中庸の道に入り入致は中道
 実おの情はたより入つて方便の権教なり
 あり人の後此物説の事人々世態を述
 け中志の風儀司を志ありて好色を
 よめて批判をなすありて人々
 てより其を定志む大昔の婦人の事あり
 視諭する事いともありてこの事あり

あるとおぼし—又云々なるものよは者—人の心を
のて勸善懲惡をみるこころ此本を志す
す志す誨淫の書とのいんるやまはせしもの
なり云々

これらの従たる志ひことしうけし—此物
よきそ淫奔のこころにたしるるもいそ散
のやくとあつ—一式部をほめんとせしよりか
つひがともなひあつりり
かつ物徳のを—一とあつるを式部か
のよもいんる量のまよ—一世のよも娘
の所あつる—一つて物徳はすえかつおぼし—

たりこやの物徳の志をあるをいふかき
つる跡をみてはら入すちひたつ女
るんこころもあつるひるね志のつよを昔
の者よおぼし—

出で女界へ見のよかつる目—一とちりていふ
されたりんまらこをれとあは志つてい
のよけはいんるにたりたれとまらへ出のり
なよこそひおほるぬことせいにあつる先
のつりんが—娘界の所まらここのせられ
つる物徳を志すよきまをいふるん

ついでにそのまゝあるをいかにしにあり
けしからむとよまはありたりとてなればいん
そゆゑ志まやとのこまやとありこいかに
物済ハ女子の教といふやうなるやうに
かゝることもありたりとおのれうこころま
てありあるかゝるこころいふこころあれば
いよこころをせす^せいふこころいふこころ
るるりさうは警戒のよあといふこころ
のるりさうは警戒のよあといふこころ
て證しをすく

古今集抄聴といふ書は賀茂翁の説とて

今の女は誹諧とあるはうらゝあやまればと
ありてそのまゝ細注志を秋成といふ人
のいそぐまのまゝ誹と誹とのまゝれを
おのれを後まゝかくいふといふことと
なり

安あま

古今集抄のまゝ誹諧と

ありて誹とくけりてあるかゝるの書も
誹諧もかゝるあり借書は侯白字君
素好學有捷才為儒材郎通俗不持
威儀好為誹諧雜説とてなり世説新
語補の注も誹諧とあり草のまゝなり

絳衣閨異制庭訓

目競、膝杖、病世^{スレ}結^ヒ

宿世^{スレ}核^ヒとあり名世^{スレ}結^ヒ

いんぐの縁むをいんぐ

佛語の宿世因縁

九

かづるなりとしるはるうくるたがり俳と
誂と古巻をい通せしむむと南原子
ハヤシヤルマ

をとの事よめりくも物のそめぬの古位
すくせよつあやくしほのきとゆしあり賀
茂翁の彩紙は六位すくせよとくを濁て
過せしよませり

梅すまは花を何倍よすくせハ夫婦の契
をいかにとんごりこれハ六位めくあひき
記をさこのよめすくせのついでまはなれり
といふまは古位すくせといふまはなれり

所云の夜あるもの
世に六位をい
人かよとん六位
世にいませは
あやめを又い
けめ六位をい

とん六位をい
て人かよとん六位
いよとん六位をい
記をいよとん六位

も二の上よある、⁺ 珠一の受映すくせやと
あしすりとしあををさるるくにかげも
同とるりあをを考し志劇の誤ハ強
解しむるいんぐ

後あつせの事よえんよすまはるちんのをこ
よ抑るしらるものをさぬといふあか
あるを古位いなるすれをを透しと解
せり彩紙よと整ふこのすく風流らうと
てえんよすまはるしとせしと

考ふる古位よとんあしとん世のよと
人かよのすくといよとんとん

後よりめて花ちる甲をさひひひ五月の
此よりさよりのまよのまよ月をうり
おもひて記者のついでうりまひさるや
まのりさるしとさるすこれに月のお
花ちる甲をかりひひひてさるまのま
ゆてまのまのまのまのまのまのま
つむ花のかささささささささささ
花ちる甲さるしとさるまのまのま
のち五月まのりてさるまのまのま
花ちる甲をさるしとさるまのまのま
まよかの花ちる甲もあさるまのまのま

あといさるまよのまのまのまのまのま
よりまの花ちる甲をさるまのまのま
おもひてまのまのまのまのまのま
まのりさるしとさるまのまのま
後のまのまのまのまのまのまのま
さるまのまのま
いほの人をあたきをちをさるまのま
いさるあり
まの武峰の持物さるまのまのまのま
まのりさるしとさるまのまのまのま
ぬ我をいさるまのまのまのまのま

と多くてうらうら物産花野のまはもい
河ありと物産申すはあまうらうら
ことありあり

夕方のまはまはこぼくしあまうらも物産
志くしうらう湖月あま孟津抄をひま
晴鈴日記のまこぼくしあまうらあまをひり
新穀の枕さししあまのまこぼくしあま
まこぼくしあまうらうら
梅のまこぼくしあまうらうら
ありうらう物産國申すうらう下は所産
山根物もこぼくしあまうらうら

あまうらまは物産のまはまうらこぼく
うらうらあまうらうらうらうら
枕さししあまうらうらうらうら
すこしあまうらうらうらうら
るわうらあまうらうらうら
こぼくしあまうらうらうら
とひまをまうらうらうら
物産日記うらうらうら
とまうらうらうらうら
るうらうら

十二支は鳥獸の名をうらうら

子丑寅卯の十二聖徳を考へて
耳と志と一なるを考へて
したるは後漢の以よりや王充の論衡
も亦考へたり又陳眉公太平清話曰十二
支所屬北周時已有之宇文護之母與
護書曰昔在武用鎮生汝兄身大者
屬鼠次者屬兔汝身屬蛇又陸長源
以舊德為宣武行軍司馬韓愈巡官
同事或譏年輩相遠愈曰大蟲老
鼠俱為十二相屬何怖之存此
てかかす十二支(考)けりを死高

せしと考へられぬといふは
鼠と一丑を牛とせしやと
此以法苑珠林を尼多す四卷
大集經云又此世界諸菩薩等或作
種、天人畜生之像遊閻浮提教化如
是種類衆生若為人天調伏衆生是不
為難若為畜生調伏衆生是乃為難閻
浮提外東方海中有瑠璃山其山有窟是
昔菩薩所往之處有三毒蛇在中而住
復有一窟中有三馬復有一窟中有三
羊南方海中有玻璃山其山有窟有三獮

猴復有_二窟中有_一雞復有_二窟中有_一
一犬西方海中有_二銀山中_一有_二窟中有_一
猪復有_二窟中有_一鼠復有_二窟中有_一
一牛北方海中有_二金山中_一有_二窟中有_一
一師子復有_二窟中有_一兎復有_二窟中有_一
有_二龍是十二獸晝夜常行閻浮提內
人天恭敬切德成就已於諸佛所發深
重願一日一夜常令_二獸遊行教化餘
十一獸安住修慈周而復始七月一日鼠初
遊行以聲聞乘教化一切鼠身令離惡
業勸修善事如是次第至十二日鼠復還

行如是乃至晝^晝十二月至十二歲亦復如是云
之_二此_一所_二ら_一の_二文_一より_二なり_一て_二十二_一支_二より_一なり_二の
乃_二名_一をつ_二け_一る_二る_一く_二一_一され_二と_一の_二文_一より_二其
虎_二あり_一て_二獅_一子_二あり_一不_二り_一少_二獅_一子_二ハ_一カ_二國_一
ち_二手_一の_二あ_一り_二席_一より_二かく_一る_二る_一く_二一_一

十五

五葉和分集神祇部より十のありよりとよ
よのこをひくくしつる内代はかくそのま
これに正その比が我社の所産のひくくまあり
て通あそりりく人のあまつけせむひく
とるんと志せり
かくの勅撰の集よりかくと不思議なり

僧万里
梅花三考花巻三
直灌公攻下総十景
橋長橋三條其所
橋場

六

とらり此うさたのあぢりくさくのさ
りさうとくつ分の下またくむとかくそ
お月ゆる
むさーのくた隅田川の月とらり橋場の里と
りさあり此亦むし橋のありわとらり
とらいつさう

安守するま夫木集の徳ええ年麻葛社
は所々なるま川のワラをえれがめつ
り今いさきそを「」うられは
光俊新伝

すさ川むりいさすすい後こそいをうり

そーのあさよちりれん

とさうせり今の橋場の里ハこの歌をりれ

徴とちるすー

ウ治拾を物流は今ハむり一歳六といふかよこ
あさりけすのふり入て人も有りはるをさう
ルてハはり溜はあ物をつひはほほまわ
あーの女あをさる大敵のうさよりきてこれ
かくすむいさといまかく人もあまよ入てかくハ
す物をもああをあまよこてあまよこをま
ーはれさくハ分よまといひはれを
むりよりあまよのちるひより物をも

源六ハ大系圖ハ源六長良子
弘経子輔相無官源六号
作者部教載リ六位之部
源六者六位之意
貸者弟ハ源六輔相過
獄四ハ走出抱之入獄内ハ朝
朝ノ身他之由ハ源六
弟可令源二首云ハ輔相即源云
ハ源六ハ源六ハ源六ハ源六
獄四感歎三テ免之云
保元物語ハ源六左近ハ
源一ヤハ源六ハ源六

すくすくを志す

こゝろ故六とく人かゝる相言利口をよそよ
くきよよ志すれはるる多し一今仁和寺藏書
目録に故六傳といふのあり将門にありき
より射らぬしよき一もこの故六たる

よ一保久平治物語より入るなり

大いせ物語古きよすくすく川を浮くといふくす
くす川に既長今集よ志くある^{武藏}くすくすの
川に人し習く志くすを文科日記よ下つ書
の國をむき一のくすくすをくすくすくすくす
洲より川の流よきなりくすくす山麓秋の中

をくすくす外めくすくす武藏とくすくす
くすくすあきくすくす五中物のいふくすくす
よきくすくすくす中物の集よくすくすくす
ありありくすくすぬくすくすの國よくすくす
とくすくすくすのめくすくす書一くすくす
くすくすくすくすくすのくすくすくすくす
くすくすくすも必ずくすくすくすくすくす
よくすくす文科日記のくすくすくすくすくす
の國をむき一のあきくすくすくすくすくす
をくすくす今集の詞よ備よくすくすくすくす
つ書のあきくすくすくすくすくすくすくす

下つたものこそとあつては、いふべきか、日記は悉く
かゝる此處のふくみのついでよきよきとて、
六年のころ、旅をたつたよき日記のこゝろ、
と尋ね申しあり

捕まへたる志願のえられぬ、ある所の印を
の更科日記にあらせしや、たゞの歳書に、
わが國といふ人の自筆の投合を、
そし、古本ありし、
てありし、
そのついで、
む、

在五中將の、
るり中將の、
せまらさとの、
に、
の、
この中、
そ、
かくあれを、
す、
の、
人のひら、

山殿加禁止若有乖違隨即受答と云

一より

古今著聞集^{乃三}十訓

抄其の六云昔え三て自所時受流國
は會く賤き男をけく老く父をけりこの
男山の弟の本をとりて其直をえく父をやする
ひたり此父の夕あるもつは海をわしけり
こはより男をうひさこといふ物を腰につけて
海をくく流を行くは是ををて父をやする
わる所山は入く薪をそんとするは昔ふくは
すりてうらみはよりひたりは海の香をけり
たのまはあやしそそのあつををんるえけり
水

流出するも其まのら海は山より流るるは
とこはごういしくおぼしてそのち日と一はを流
あつて父をやするは帝此ををづし
靈衣三年九月はまのありの昔ありて所流
是別を尊のあは天神地祇あをけりそまの流を
わるそと感せさせのひて流は流は流は
りり海の山はあをそまの流は流は流は
みよりて日十月は日号を答を改らぬり
この後妾謎のそりてそのの續日本紀
養老元年^{靈龜三}八月甲戌遣從五位下多治
比真人廣足於美濃國造行宮九月丁未天

皇行幸美濃國之甲寅至美濃國東海道相模以來東山道信濃以來北陸道越中以來諸國司等諸行在所奏風俗之雜伎兩辰草當耆郡多度山美泉賜從駕五位已上物各有旨云云十一月癸丑天皇臨軒詔曰朕以今年九月到美濃國不破行宮留連數日因覽當耆郡多度山美泉自鑿手面皮膚如滑亦洗痛處無不除愈在朕之躬其驗又就而飲浴之者或白髮反黑或頽髮更生或瞶目如明自餘痼疾咸皆平愈昔聞後漢光武時醴泉出飲

飲之者痼疾平愈符瑞書曰醴泉者美泉可以養老蓋水之精也寔惟美泉即合大瑞朕雖痛虛何違天貺可大赦天下改元萬壽三年為養老元年天下老人年八十已上授位一階若至五位不若授限百歲已上者賜絕二疋綿三疋布四端粟二石九十已上者絕二疋綿二疋布三端粟一斛五十已上者絕一疋綿一疋布二端粟一石僧尼亦准此例孝子順孫義夫節婦表其門閭終身勿事饘寡悼獨疾病之徒不能自存者量加賑恤仍令長官親自慰問加給湯藥亡命

萬葉集十九
布里在氣見
都道伊伎騰
保流許已呂
能守知斗思
延之

新撰字鏡曰悌悌意不舒池
也伊支止保留こみけ
字のこころはさしや

つよまうかきぬことをわさるる

日本紀卷の六垂仁天皇の條に倭仰喉咽道
退而血泣イヤナヒ日夜懷悒イキトホリテ無所訢言とありて

懷悒の二字いよとけし訓せし悒中ハ
字書上不安也憂也と注ありてまげくと
有りさうハいよとけしといふ水ひいさむと

ししていりをもろよとくハ後の轉
志さる流るる又ありさるしよ何れ

神武紀又憊忽のみまをよるせし志さ
のちとよとこ或云明狭間とよとよ

日史の源をさる急るることよける詞と
源氏物語をしまわさるる皆志はくくの

白氏文集牡丹詩
暫字をあらはし
中訓

サニ

けしをさるるくさるる
いほの倭よいしハ大なる

おのれがまを二まもこの山さるのたよりことり
まろけいしとらとけさるるまをいしめさるる
さるるまろけいしとらとけさるるまをいしめさるる
女まろけいしとらとけさるるまをいしめさるる
此のの流の細流まも女まろけいしとらとけさるる
こまろけいしとらとけさるるまをいしめさるる
つよまろけいしとらとけさるるまをいしめさるる
まろけいしとらとけさるるまをいしめさるる

梅すまをこに女まろけいしとらとけさるる
おひてよろつとらとけさるるまをいしめさるる

久ららくるよひつる此女を以て女といふ
しやうそえそまうそま上の女をいふと
のめつるをいふといふは人の名なり
ふらふ女をいふは此人はじふいふといふ
さむやそ細蓋のりまきき穿流るをい
巴抄の源氏をきくといふはことかたけ
よらふに没るに柳の本を友毒の元なる
りのり人として冷泉院のありまきき
院のありをいふとあがていふは
すまふはたかめ此院をいふすまふ
此のすまふといふは此のすまふといふ

久ららくるよひつる此女を以て女といふ
すまふはたかめ此院をいふすまふ
この院のありまききをいふは
よらふに没るに柳の本を友毒の元なる
このすまふといふは此のすまふといふ

十三 鞆

和名鋤の唐鞆をいふ鞆は韋囊吹也とい
ありて和名布岐加波といふは今ふいとい
よふいといふはかさをよこさるるといふ
能保岐利といふは今のこまきといふ
木天蓼を和名といふは訓也といふ

鞆字鏡曰錯乃保支利
錯乃保支利鏡乃保
支利字書錯屬石也

きんち

と折一多てそりかゝるおれおほくおれ一
これに物持あつたらん一河より汝とてしとて
と物うらんゆたれといふらとてを汝をきんち
とてさるやた一を注一付る物をさす今
考ふよりくはきんちをさるやとてきんち
といひさるやとおりのひらさるらん

のろ

こころおそき人をもて一を信持よのろ一とてり
これにぬる一の好せらるやとおりのよおれ
よよ未若此の所生ふのるをかくるよよ若

かくんちなる一物さるおれさるまうりぬらん
のぬらさをさるくおりのぬらんさる
ありいぬのろ一とてさるよよあつたり
申す親の事よりおれを火さるさむけり太
近片風一とてさるやとておれを片月おれ
孟付妙をひきさるくは源の所出まよりさる
火をさるのけさるさるとさるせり

これに穩るの源もおれを信持源氏のいせ
さるをさる火をさるのけさるさるとさる
て太近うらちおれをさるさるさるは源氏
のいさも思入せぬあさはさるさる太近

も卦めらるるさぬく大とことそらぬ法師そら
ハるる念佛にこちひよかりてこちひよかり
よる也のこひとり此人こちひよかりある
こちひよかり風しそらふそらふを志すそら
るるり獨とかつきを火らうとらうつ一換
川て志して流るるそらふおとん申

サ 太宰子の獨語は仲麻呂の明州よりよきそら
とよあをそらるるの歌は盛唐の佳境を李
太白の峨眉山月の歌と同格する一一定家々のあ
まのそらと改らるるはこちひよかりとあり
考ふるあをそらるるの歌は土佐日記のあを

形云あを西条俊成
定家々のあをの歌は
けむしあををさすは
のちひよかりとあり

うなつあをそらるるはこちひよかりとあり
てとらるるやされと古今集羈旅部はあまの
そらとあれは定家々のあをの改らるるは
あをの百人一首のあをのそらとありより定
家々の改らるるはこちひよかりとあり
此らるるはあや

ハ 同人の古文孝経の序は幸に孔壁古文孝経并
與安国之傳存す我日本者寧不知珍而寶之
哉とあり

安あつるは孔壁の古文と改らるるはこちひよかりとあり
ゆる皇朝のつらるる孝経の序の科斗の

やうなるものありとをききす。こゝに世にありし所の
考經の章こそ名をいふところなり。ついでに他
の人のつけくくす物と知りし孔傳といふ
ものも、いふまでもなくより、後ある人も
ありたり。をいふを、詔ありしを、禁ありし
ることもありしを、かの序に清和帝の制を
擧げしを、いふに、国史をいふなり。ありしを、
こゝに書つて、三代實録卷之四、貞觀十六日壬
辰制哲王之訓、以考為基、夫子之言、窮性
盡理、即知一卷考經十八篇章、六籍之根

源百王之模範也。然此間學令孔鄭二註
為教授正業、厥其學徒相以盛行於世者
安國之注、劉炫之義也。今案大席玄宗開
元十年撰御注考經、作新疏三卷、以為世
傳。鄭注比其所注、餘義理專非、又替之
鄭志、康成不注考經、安國之本、梁、亂而亡、
今之所傳出、自劉炫事、義紛蒼、誦習
尤艱、靡厭衆止、更招疑義、故玄宗廣
酌儒流、深迴睿想、為之訓注、冀闡微
言、即勅學士儒官、會議可否、於是當
時有識碩德名儒、咸集廟堂、恭尋聖義、

妙理甚深常情難測同共嗟伏眼請頌傳
侍中安陽縣男乾曜等奏曰天文昭爛
洞合幽微望即流行仰光東葉制曰可
然則孔鄭之注並廢於時御注之經獨
行於世而唯傳彼注未讀件經假之通
論未為允愷鄭孔二注即謂非真御注
一本理當遵行宜自今以後立於各官
教授此經以充試業庶草前儒必固之
失道先王至要之源但去聖久遠學不
厭博若猶敦孔注有心講誦兼聽試
用莫令失望とあり今也あふるの考

經あり孔壁のまゝあるを人々康の比わ
りきしるるに論るるありあり

廿九

年山記園の月安積先生の常照寺藏千
字文記を載りその文は夫々文梁武帝使
周興嗣編之以教諸王之書而百濟王仁所
上應神天皇者也皇朝文學之興實其基
于此とあり

今考るるこの文いふをやむるこれいふ
古事記よりかかれたるもの一とされし應
神帝の十六年ハ晋の大康六年とありし
梁武帝より二百余年とあるをやむる

古事記は千字文と志せり然るに子かきりて
 るれども淳化帖は漢の章帝の書ありとて
 載るる文をありといふ人かゝるものありとも
 おりとも歐陽公の説よれば義之より先
 既にありといひ安積子の文の正しくまゝに
 梁武より後王仁より應神帝よりま
 つるものとすへく年代前後せりさる博識
 の人よりしをたのむことあることあり
 千慮一失といふべし

いづのほうり

都人いふともいふ關東人かたことより形の

浄

鳥賊男子はなかりありて子孫いふより
 近江西川祐信の志すけり物なる鳥賊皇の
 うちせり關東を尊皇といふは是の
 おほく物なる志すけりなりいふは
 師帯之とよきなり和名ぬえんてけり
 風草紙書るなりこの文もあはれ
 今のとびさしといふおはれのさるなり
 つらなるなり

信語數とて書よ浄をぞけり訓あり
 大に志す浄ハ誠場なりあり

都人といふ
 關東の
 人とも
 あり

古事記の千字文と志をせりいふかきりし
るれとも淳化帳の漢の章帝の書なりと
載るる文をおりていふかきりし
既ありとてり安積子の文の正しくい
梁武より後王仁より應神帝より
つれもとてり年代前後せりさる博識
の慮一失といふべし
都人のいふとてり關東人かたことより取の

鳥賊の事いふれり
近以西川祐信の志をけり物なる鳥賊の
おほく物なる志をけり
師勞之とよきし
今のとびさしといふおの夜のさるをけり

信語敷とてり書よ浄をぞけり訓せり
大志を浄ハ誠場とてあり

都人のいふとてり
鳥賊の事いふれり
近以西川祐信の志をけり
物なる鳥賊の
おほく物なる志をけり
師勞之とよきし
今のとびさしといふおの夜のさるをけり

るし唱ふる事なり評雲をるしとる評のつ
とむる事し清の康熙帝の坐右の聯は恭
操ハ丑浄とありとも知くし

世三 水滸傳

宋江ハ仁智の長者にして賊とされしは據る
事より物とすし人の志好くことし志く事を
金世歎の評は志して宋江を女如智の女
賊と志く評をいことし事りるし宋史より
尺くす淮南の盜宋江ハふくむし水滸
傳は書ることし事りは少くむし物あり
す世歎論ハ還道村を宋公明三卷の

天書を九天玄女より得るとし事りて説
きをもすしりかの説の事りるし天女の
たすけありしや作者の本ことし事りる事り
評るなり

世三

東海談はなるし事りし書ハ赤城翁の若話あり
未練の字者の假字の外題を婦可成談と
ありしあるけし事りし文書なる事りる事り其後
而をる事りし又奈流邊志とありし事り
文書なる事り僻ことし事りる事り

按ずる事り可成と書し事りし事り奈流邊志
とくけし事り仮なる事りし事りし事り文書

有りといり三代實錄十三は依此天旱災波
所致奈留部之とあり新をとりつるしとせもや
此の傳はハカこの書の體をれい其れを眞字
とありしとて文有るりとしてとふもそのよし
ことば

曰書よ云伊路物伝は春りのさしと云るし
志をかりしといり此物伝の伝え知の字義を知
さるるも中華の書よ知袁州知漳州と云ふの知
の字ハつらさしと云はるる知行所等の知も志
といふことありしと云るし行あるり云々
考ふこと頗るふを志るとして我國の古

言るり云々といせ物伝の伝えの知の字義を志
することと云ふ言なるし志といはるる
物伝は云々するもはるるもあまはるる古
事記日本記美葉集るとして所知大八嶋國
御八嶋國とありしと云るし云々
志るし云々の友知るれい志るし云々の論る
し云々の古言ようといふ人の云々云々
と云ふことあり

曰書よ本田善吉といふ人に用關の事

此をせざる人なる何れの校定り寓言せや之云
案す推古帝の日本田善史なる名あり可
人のおろしきといふはたれも志しざるなり
并關曰く此をせざる人といふは「本田善
史」といふ人善史の如く本を供する一都の
の月りきりたるは是利の末の比ありたること
そのや古今夷曲集の詞書より志すしあり
しりつぬりしなり

四

本邦なるかかけら玉うまといふ書より東鑑を
ひきりて藤原景光著佐與美水千といふこと
是申今の書より布の細目といふありは此さよこの

記しるるなりと志すなり

書よりまよふこの布の山ふ東鑑をいふは
いふもや和名抄に貫布唐韻云帯布名
也漢語抄云佐與美乃泥能とあり和名者
とありて人をさしひける人のかきりのこと
をすれられいふありたぬことなり

世

同書より孔兵名をさすをいふ「ヨ」の
はなれこのをさす此の倍にいふは名をさす
とありていふありそはけの地の名をさすから
すしそのさすもいふはまをせし物なりとい
ふはつこいふかきりしをいふはけさぬありたり

名をそりたれとおのれもすそよおほやけさ枝の
定をやふりたさよあつややすくてこゝろおのつ
くは物よ聖賢をたごめそり信を
いづくへんといふすこゝろをいそとせり
真曆考玉くけさまるまるしん書も
よしよささる僻説もおほり我々孫
くしゆのらにゆめかろ人の説よまよと
るれ

六
源氏物語ゆめほのすそは推本のあまうそを
くらたこるよ山の推りあるそいづくこま
あつあそとあり

安あつし抄よこの家の出やをあげすきたより
出つとたひしよまよみゆつは物語を
よあつしおひつきのまよさる交ありせば
うきよのうをかうそしんあくれをやそちん
そまをぬせりしんしん家の改まはぬの家
あり印本のうつはははれ家のこゝろひつ
うきそをうきもあるまりて志をちり

廿九
束らむ花のまよすこゝろさしんかつて
まよかいらつまこほれしんほじいとあつ
にひるけりまよそらんおほされてし
ひまあけぬりいとまかいらし物らうよあけ

もそそめなげでえとあり 遊月抄よおひるほり
未稿の親の生直りより人をきん出さん出る作
う人の心しと志るなり

考ふよ光君の末つていなりとくよひそあまひ
八月廿五日と前よんてう後よこぬい
のたうとすくしてそ内におそいけりといふ
朱菴院の行幸のときを十月をうりのこと
すくしてとあれを十月より後よぬい
よやうちとけり音指の月しやと入ま
ひてとたけりもそぬいなることいふ
のせらえとそおきりておきり

あれもまらむしよれしと一月の月し
下んてくけりかほるこの日以す
アは生をほうなり人とあつてもあつ
これ志ひくおひるほりと釋志をい通せ
ぬやうなりいふ考ふよおひるほりそ
なほよよあつておきるほる ぬるほ
るとい今もしよ詞なりとあつていぬ
くふいぬを源の心後ありて
起直りさん時いさきのをせなる
すけいぬぬ鼻のなるもい志
るう人とおほされて格る川あげり

しうさまのよの物ころおほし物してあけ
そく眼を志とくまおかけりま
日の光をいれりるましとハおい
ほりるをきくありしをたびと誤り
してさる解とるまらるる

祢さあのみすさひニ

乙川雅望輯

史記天官書
海旁振氣
象樓臺

蜃氣樓

本草云。蜃蛟之屬。其狀亦似蛇而大。
有角如龍。狀紅鬣。腰以下鱗。盡逆食。
燕子能氣成樓臺。城郭之狀。將雨
即見名。蜃樓亦曰海市。其脂和蠟作
燭。香凡百步。烟中亦有樓臺之形。
志名り志は海中より氣を吐りハ
蛟のときさるる蜃といふのるり

三
むさし一軒

そのとちんにいさるひて玉川のあゆま
んをいそふるまの社中の六社はま
てその根かこのあまやをうてあ
わをもあるいの男をさまたてて國分
寺よまおつたより十町ばかりゆき
すまきくやおひ志くりさうたうまあよ
のたうあるいの人のいさるひさむ
むさしのをうてゆきかたつ
りよよ人のいさるひさむおつた
といよやういさるひさむの國分

たうまをいさるひさむありそのさるひさむ
むさしのをいさるひさむありそのさるひさむ
すまきくやおひ志くりさうたうまあよ
のたうあるいの人のいさるひさむ
むさしのをうてゆきかたつ
りよよ人のいさるひさむおつた
といよやういさるひさむの國分

てのちかの友とちんは山先生の丙辰紀
行をいそふるまの社中の六社はま
てその根かこのあまやをうてあ
わをもあるいの男をさまたてて國分
寺よまおつたより十町ばかりゆき
すまきくやおひ志くりさうたうまあよ
のたうあるいの人のいさるひさむ
むさしのをうてゆきかたつ
りよよ人のいさるひさむおつた
といよやういさるひさむの國分

いそふるまの社中の六社はま

すし茶茶なり此國の稻も昔西越谷
念筑河越嶋卓恐ることも皆むさうの
内より作りしつれも所よりそるれい毎年
こつよるせのわとちるをりい後大に戸よ
すあの人らしきりの別はありとあり
人もおぼしきところありつさところあり
ゆくものもある一かの此うちよくら
く田舎人のこととちりつはよあま
ちるをねひいりこといすもさひを
りよほすにらむ

吾妻森

大江戸亀戸天神のうしろを四五所
ゆきてかこの畑はありこの社をや
まもつたのこの御妻橋坂の靈
をまつけりと物とちるをりさしとけ
くさし説るうおひをりしことい
故原茂睡入道のえりまれ一ちのあり
とくちおぼしきよあまの森を題
まけちるうあまの森をアんりせは
月入江の波そちるあまの森あり
自注は吾妻森は東人といふ人の住
而こそ本不横堀三日のちありとちる

かゝる借書は志をせよといわけていりま
あつねとこゝれをいすことせむよとも
このあゝかきつたわくめのもり先名不取
集、狭山武藏一説河内と志すありて
武藏とさぶあつねもあつね又むしり
とつて取六帖は出ずるまの地のこ
りそいけをえをれ我やねとせとありて
武藏とつとつて河内とつて人の作
にこの地の名よつて強て記標をいさ
んとそつた地の取のまをひききて出せる
りりよよとぬこととに狭山の河内なる

古事記中巻之印
色入百子命者作血
沼池又作狭山地又
作日下之高津地也
こゝれ河内國之

七
あつねの道の記

契仲子すまよつて勝地吐懐編は續日本
紀云天平四年十二月丙戌筑前河内國丹比
郡狭山下池神名帳云狭山神社狭山堤神
社並大社也とんてり

これに持大細と名原を廣々の作を杖桑
拾遺集に載りその中にいらく大井川
をくちを流るゝんといふ大なる
まりちる流るゝ足のあつね河内と
いふのつすといふ一歩もなりかゝるとい
うやういふ文をよみていふ人の雙葉ある

るをむかひぬはの人にかきまじり
す大井川をうちつりするまにありぬ
らのとこの後のよの人よりききすもま
ことなるすすし又孫よちの橋をふ
ことろかきとありきいふの以てか
こは橋ありしと云ふ又大破を志すは
よ小舟後破を志すく駕をさせく
磯のいはよ波のうらよせくすしと云
ろーやもあやに流るる彼はゆきまにそ
いと舟のえくれすしひらつちるといふを
通く場乳を船すつとあり考す

やもあやよりえくれすまを一首の歌
よそくゆきの下よのまなまなる
杖桑拾葉葉よかきつけてあるハ等
つあやまらさむし

東園紀行

これと同書よのせられて源毅行の作あり
その中よりこの石公喫ハ用武王の
するしあるハなるはひさくらむ
いふしこころ

よのよののまよきのふのやうなるの
ころのよりいふはくを昔物終よ

すしや なるものよ ちたちあつたを
つけらひしめあらんをしらひよれと親
のうげとやうしうあまをすこころをい
で人のおとすしそらんしとや古代の廻
夜まてもうらやあつた女をのいさあ
なもうけひき給さるをほめをりり
かの五のくよすあられそくやすく塔こ
ほらんしやしをたひひ出のひそく未橋の
水とくをめでのくさるり定家々の本
と塔とあつたそよまの誓けは在嚴論
をうていそよしハ綱をのりも負をかりし

+

とゆへにけしと書よ古傳の誤ハと 神代
より誤つたのまゝを傳りしをその古傳
誤のまゝに記されたるは日本記されしかの軽信
たる唐書のおもむき書ともよまらざるは時代
を以て論ずべきにあらず撰録の時代を後され
しは傳説の類ハ神代のまゝを記す唐國の古書より
西へてくるはちきとるるやと云物と神代は
昇善惡部正なるはあまの世中のるも者なり
昔々のことわすあまの事もすしとて國の記
るものなりといはたり世のあ人のいあはれしこと
ともたきられ又人の禍福なるものなりと記すあ

くさるるも神代紀に記さるる神の事
西神と申すかの伊弉那岐大神神の所
儀の禊より成りて福は神と申す神の
以て靈より成りて諸の邪を去りて
ちるる事なる神の威をあらびて
神代紀の類なる事

この後めりし事いひゆるりし事
人つさるひよあひさかきあはるる事
ヨグロひの神の事あることいふこと
ハ吾人我事も安磨もさるる事あること

神代紀の一書は吾前に於不須也凶目汚
穢之處故當滌去吾身之濁穢則往至
筑紫日向小戸橋之檉原而後除焉遂
將湯滌身之所汚乃興言曰上瀨是太
疾下瀨是太弱便濯之中瀨也因以生神
號曰八十枉津日神次將矯其枉而生神
号曰神直日神次大直日神云云とあり
古事記も同く八十福津日神の次は
大福津日神と云ふ事なり舊事記
よりけりも同くこといふ所も福津日神の
ありし事なりと云ふ事なり此神

延武武所門余の
 文は天のまろひ
 悪くしおまこり
 お口おせまよ
 むるるるるる
 のこるる

人のあまのつとをいふをさるけ
 のりといふをいふるるる。元明帝和銅
 五年より古事記なりて養老四年より日本紀
 撰りてよりさるるる。廿二年よりりや
 むるるるむるるる博多多識るる人あり
 したるるるるるるるるるるるるるる
 杜撰の甚るるるるるるるるるるるるる
 佛書よりさるるるるるるるるるるるるる
 の神は附會せりるるるるるるるるるるる
 如一女人入於它舍顔貞儂麗以嬰
 珞は嚴其自身主人見已汝字何等答言

我身即是功德木天我所至處能與七寶
 具定主人聞已心生歡喜復於門外更有
 一女形貞醜陋主人復問汝字何等答
 曰我字黒闇我所住處所有財寶一切衰
 耗主人聞已即持利刀言汝若不當斷
 汝命曰汝甚愚痴汝舍中者即是我姊我
 常与姊進止共居汝若驅我亦當驅彼功德
 天言實是我妹未曾相離我常作好彼常
 作惡者愛我者亦應愛彼主人即言若有
 如是好惡事者我俱不用各隨意去と志
 せりこの息暗女ハ耳々々々申急子思耳也

なつくとをいふる不吉、人亡家破と
俱全ありとて、義楚古帖も志しり
この思國女の正をたひて禍津日神を
せし物なりすとて神學者よりその強て
説をなせしことはいまもゆるるをたほりこ
國の他國にすくゆることとあがりこも
儀よりゆるひぬきのひま、たやといふ
とあはれそんんす

土
くほのすさひといふ書は驛路鈴ハ數七ありて
官使七道ありといふ一ツたすよその中
口のつけし終ありその終をたまひぬる使ハ道

のほご^赤あつてあまるといふ

このくほのすさひといふ書ハことわりあり
正をのきあげし中ハこの説ハあまれり
とそあはれゆるるとるれハ數七ありて一
つまよといふといふれの由あること考
るハ公式令ハ云凡給驛傳馬皆依鈴傳符
尅數事速者一日十驛以上車緩者八驛
還日車緩者六驛以下親王及一位驛鈴十
尅傳符三十尅三位以上驛鈴八尅傳符二十
尅四位驛鈴六尅傳符十二尅五位驛鈴五
尅傳符十尅八位以上驛鈴三尅傳符四尅

傍者莫不流涕此山曰領巾魔之嶺也
作歌曰得保都必等麻通良佐用此宋都麻
故非有比例布利之用利於返流麻能奈
こまはくし後人追和の作四首あり別し憶良
の歌まやうくささひあのことひれありしやまの
るのちまきつてをしりしものせくあれし
いつれもさよ吹くるとるれるをいしをすまあよ
このありきまきくを信はよるし物事を
るりそそぬきまといあ歌も詞少し武昌山
あはさうくたのありあり考るよ古今著聞集訓あよ
出明録をひきそ望夫不の歌よとあけつぎよ

さき歌うことを志すしうりこれをもとるれ
りしとあはれしそあめ望夫不の歌よと
事もよきまひてあれを依同後のことと
望夫不の歌よを混しししがたはくの人
の物語をひきひるころりしとあけつぎよ
おりのこと

十三
古今和歌集序

すて此書ハ師傳口授をえこれをもとるし
えりしと人しありされを周諸般般の信
屈聲牙るさるしあす女あま志し
したははさのこよこらるしあす父もおほ

つすこの序は歌の字はちるりかぶのうへも
かくあまのきとくけは詩のやう義をひが
ほ志く書うりむ風雅頌と賦比興六
のう別るるを混ておぼえをうりむ
るりその神はまうりあすうへも
とくこの二の名はこまおはくしてよ
歌を詩はしるゆはの歌うりむひぬむ
を志しむたの歌はあはむとあまの
てせふはいうもや序の御はあはよ
はうの歌はとえあまのまはまは
一は人の言あまの身見人の説は

古

つるあまの天神

南麻子の後よせにつるあまの天神の像あり
これに若人の圖をくまらとあらし
画工のたのしみより志すのの圖を
くまらとあらしこゝの圖は讃波
あまの若人の若人の昇進志す
まの讃波あまの若人の昇進志す
あまの若人の若人の昇進志す
あまの若人の若人の昇進志す

十五

桐菴の書にありやうつるあまの天神の像あり
志すあまの若人の若人の昇進志す

を引て夕殿螢飛思悄然秋燈挑盡未能眠と
いつ長恨歌の文をひらり

拙するもよの夜いさつとくやもあそそ
そのあハ式部うころよハも恨歌の孤燈挑盡
未成眠遅に鐘鼓初長夜とあるをうけ
てそしひをかけたつらうあそそそ
心をのつるこののおもりのおきくらゆる
うしよるあゆるさそそそそそそそそ
しる物るり夕殿螢飛云とくハハハハハハ
あるむい輝く鐘鼓云をあげたハハハハハハ
判おをいつつとせよのい

十六

同をゆききといつる詞のほは俊ぬハハハハハハ
ゆききセ夕もうやまぬぬ物そそ
ける作者人れとそそそそそそ

考るよち能やハハハハハハハハハハハハハハハハ
拾も集恋二ハハハハハハハハハハハハハハハハ
うり人れとそそハハハハハハハハハハハハハハハハ

王世貞の列仙全傳も子ナ自アリ一枚の巻の書を評す
黄梁猶未の業
熟のことそ有かれも昌翁二在七昌翁その名ハ
昌翁の業
かたし人とかし人の遠むあそそそ
昔は信の頼りてい盧生とよそ一人の名のや
昌翁の
舎はいそそそそそそそそそそそそそそそそ
名はあそそそそそそそそそそそそそそそそ
生のよそそそそそそそそそそそそそそそそ
昌翁の

を引て夕殿螢飛思悄然秋燈挑盡未能眠と
いつ長恨歌の文をひらり

拙するよこみ泣いすつくやうもあそそひす
まのぬい式部うこころよは恨歌の孤燈挑盡
未成眠遅に鐘鼓初長夜とあるをうけ
てそひひをわけてつらうあそあそしす
太をのつらこのとおもひしのおききらぬら
うしよるぬるさうとやもさけささう
しる物るり夕殿螢飛云とくははしすとも
あるむほほ鐘鼓云をあはぶれい式部ん
用おをいつうささうのいさ

十六

同を申志きといつる詞のほは俊のいハはは
申志きセタもうやまぬぬ物ささ
ける作者人れとさうしあり

考るよ古能才一よいのみおふるやあそ
拾巻集恋二よいよい人志すすとのを
うり人れとさうはるはよれしあかし

十七

字つ了小郡野の市は盧生とよりの西粟の飯
かひしよは楚國の王となりて五十年の業
兼の姿をさうとさう

このよ謡曲ほのせうよくの志をよこ

されど業業をきかぬる者ありあはれ楚
王とありしといふことこれ枕中記
といふ書に及んく唐の開元七年の以
道士呂翁といふもの邯鄲の道より盧生
にあひて囊中の枕をかくて寐させし者
進まず奔られ戎虜と戦ふと志く終り
は列のまゝの如く邊將とすしをむすひ
不軌を圖りしと誣られしとやよ下されり
は又中官ある者のことなりあひ死をまぬる
驩州といふ所ありしを帝の賞するを
きりて中書令とす一燕國公と封せ

られ五子を生させ孫十餘人してまゝ後年
ハナハナう病て薨しとありしを盧生
伸志く寝ぬれそ呂翁のうまひあり
黍を蒸とありしうまひ熟せしはこと
ありよにむつしとありしとあり

六

あはれゆみくそお院の御胤をやとせし
女所を志せしなすひてほ志をいりしこと
ほとよこそありはれとよこそをなれはつり
をそよやしむしとありしとありしとあり
志せり

考ふる女役をくし今物語はいづく小大

進とす。一かよ。いと君。く。て。う。ま
さ。し。ま。く。山。麓。の。柵。ま。あ。つ。け。ら。あ。る。も
や。く。一。わ。れ。ま。く。世。中。ま。あ。り。つ。つ。あ。も
に。る。や。ま。ひ。を。と。よ。し。う。ら。は。は。ほ。と。あ。く
ハ。懐。の。別。當。光。屋。ま。お。も。志。く。こ。の。り。く
る。り。に。り。子。を。と。い。ま。き。後。り。ら。と。あ。ま。お。わ
り。り。く。亦。ち。う。ま。あ。た。い。の。つ。の。ま。ひ。と。り。え
ぬ。う。こ。ま。あ。ま。あ。り。り。り。を。え。ん。て。光。屋。を。ま
ほ。と。よ。い。の。ぬ。う。こ。に。あ。り。と。い。ひ。う。ら。は。は
も。ほ。と。あ。く。小。大。進。今。い。り。り。や。さ。く。く。ま。あ。ま
と。つ。け。こ。り。り。な。が。ら。り。り。と。あ。る。や。り

こ。れ。を。帝。と。名。集。の。運。交。と。せ。い。い。い
し。き。強。こ。と。あ。り。今。物。次。と。い。く。ま。ハ
太。常。格。ち。ま。信。毎。新。片。の。作。は。ま。の
ま。し。小。大。道。ハ。栄。花。物。流。ま。り。ん。く。て
あ。る。い。な。く。ち。ま。ハ。ぬ。ま。ま。ま。中。ま。と
い。く。お。も。い。く。く。あ。り

十九 次血跡の廟

繪園とす。書。子。杭州。府。の。草。鞋。三。郎。の
廟。あり。願。靈。紙。著。あり。此。神。台。の。盜。跡。を
ま。つ。れ。ら。る。う。と。志。く。一。あり。此。を。め。り

らーき車なやしとけりひをりし
一又よく州を為こて空あやあ詠
園青山立詠随筆よと小野照
崎明神ハ江戸坂本よあり此神
名照崎といふ盗賊よと上野よ
信て往來の妨となす強よや
とらふて此坂本よ刑せらるる
丸ふ人ななやます信て神
いそやとこありいふと山野
管なるこやあやます了了

とあつひとのかきりきす
一てかゝあつるよやすらぬる神の祠よ
ハかゝるよとひにほほも一が亦も
業よ天神といつてもすまひに
をのこをまらぬるなりと但徳翁の
あつ一よかゝるより百斗のいさ
きををるあれを筆もすくよと志
田舎人いあやまるとこそたほらぬ
拾遺集秋詠よ母之お飯の宴の法あり新
又ていふやいくらむら月の約

三

古今著聞
集卷之五
三六

考るよこみ歌ハ其集集よカリある神を
ひ川は歌えく今も嘆くむ山吹のそま
といふをかりしてよあるちよ一兼集り
夜うつ一き時やきぬむとよある歌を記
州文の難せし時母之の歌をのてこく
くすハ其集集をた忘れくもや

II
るよ一しとく書よ入夜といふとハ昔の博士
のいふんえくすハか目をも更よ物くも詞
ありとあり

こもるいふありむ入くハよまを利あり
とて唐土を内と一我國を外とすとも

いひくかく一歴史ハ我夷の地よゆく
を入とせくも亦もあまハんくも一孫
遊ハ新題も觀ニ永樂公主入番と之
少くもをやこの翁さるこくもより孔夫
子の賛よいふく日本國夷人といひ
くそかれりむ

III
口書に火の司んといハ火あやふいと云るこ
本朝文粹よん申柏子木も火あやふき木
ありと志るせり

考るよ時を忘るせあるハ火あやふいと
ふれありくよ木をうらせめくハ後の世

のさゆをいしよさるるを 拍子木ハ
拍板するの拍と同一を釋名撰也と
あるに依り源氏ささるるをさるる
りせとあるも拍子の意有り後世本を
二ありをさるるを拍子木といふは横を
よりせしやうしきといふ有りひあるは
すしといふは附會の誤るるむ

十三
朗詠集

枕山定迎暗庭月暗といふを覺明注は
解志時務策註云 枕康宗叔夜家
植五株柳又時人曰五柳先生とあり

枕康を五柳先生といふを、
よりて志らくらるる永瀾注といふ物も
志る志るを、覺明注のあやまりを
けしるるなり

十四
侏文のあやまり

今の世の侏文は此中といふあやまり
は、かくしきます脚座におし
とらふ訓あれ人をあやいしん、
かくしおのれ、をいふも、
不佞も病をよては、
みきりきし、

二郎三郎も本妻の子ハ嫡子と
し太師をのこ嫡子とおりひか
息女とおのか女をさしてい
人のしあをさして息女とし
つる

せいひく申

食経^シ作^ル糲^コ法^ヲ取^リ蒸^ス米^一升^一置^キ沸^ス
湯^勿冷^過熟^セ出^シ著^シ新^羅内^ニとあるハ
和名抄ハいそゆ^シヒメといふ物^トこれ
ハ飯^もあ^らず^シ饘^トもあ^らぬ物^ト志^ス
今の世^ハ飯^をくら^ふは^らず^シ飯^ハ米^を

炊^テ蒸^スをい^ふ煮^スをい^ふをい^ふ
米^を煮^スるハ饘^トなり和名^ハいそゆ^ト
い^ふの^ハ飯^トなり人の合^ハん^トをい^ふこれ
なり飯^トなりいそゆ^トなりいそゆ^ト
元方^ハ季方^ハ炊^キ飯^ヲ算^スをい^ふをい^ふ
米^を入^レる^ハ飯^トなり飯^トなり飯^トなり
なりいそゆ^トなりいそゆ^ト

共

宇治拾遺物語といく昔^ハあり^し大^山山^宮
より大^山のい^ふきた大^山卒^都婆^一とあり
その山の麓^ノ里^ノハ十^ハあり^し女^ノ住^ル
日^ハ一^夜の山^ノい^ふあり^しをい^ふなり

云々いふそはは血のつんをりまむいけいんらりて
あうま海とちるしきとらん文の中おれいん麓子侍
なるれいんらりるいんらおほをれて死をすすむとあ
しそい血つなはいけいんといふかぐ口とよん侍ら
としんそいんいん田かともいぬ女いんいよもいんあふ又
まていんよいんいんいんいんいんいんいんいんいんいん
血をあやしてそいんいんいんいんいんいんいんいんいん
あつぬ又の白女の白ういんいんいんいんいんいんいんいん
つしんいんいんいんいんいんいんいんいんいんいんいん
まういんいんいんいんいんいんいんいんいんいんいんいん
にけのびていんいんいんいんいんいんいんいんいんいんいん

なりなんとすとあやぬくつげまりてあふりて子
孫ともよ家の具足ともおほせりてせそおのれも
りちりてまひきりてさとうりいぬえいん風の吹
くく雷のなるくともおひあやむいんいんいんいん
つやいんいんいんいんいんいんいんいんいんいんいん
まちあふりいんいんいんいんいんいんいんいんいんいん
いんいんいんいんいんいんいんいんいんいんいんいん
るいんいんいんいんいんいんいんいんいんいんいんいん
もますすまもいんいんいんいんいんいんいんいんいん
あふりてあふりてあふりてあふりてあふりてあふりて

いんいんいんいんいんいんいんいんいんいんいんいん

ぬきぬき 梁任昉述異記より一とありかの書

はしきく 和州歴陽淪者湖昔有書生遇一老姥

姥得之厚生謂姥曰此縣門石龜眼血出此地當

陷為湖姥數往視之門吏問姥姥具答之吏

以朱點其眼姥見遂走上北山顧城遂陷焉

今湖中有明府魚奴魚婢魚二のものを補て

九 舟船

いふやうにたを船ハ大なり船なりいふく

舟船と小舟をいひくも一湖のさき

西もも自を漕とほれる ありらるけり

再考三代實錄

卷之四十六元慶八

年九月十六日癸酉

令近江丹波兩

国各造高瀬舟

三艘其二艘長

三丈一尺廣五

尺二艘長二丈

一尺廣五尺二

艘長二丈廣三

尺送神泉苑

古之のいふ

なるり新古今集よりこうせ舟とあり
よお奈よなるるてわろ尺井川とあり
いふ所の解よたりせ舟ハ小舟なり川の船
のりき可もゆやうまたるしよつくり
てあさくひりき船るりと埒あるをさう

蒙求の晋書を引いて樂廣の舟の酒を

飲了時杯中蛇影のうつりしるを

載る所の風俗通ありて忘即之祖又

柳汲令主簿より一時杜宣詣て酒をく

こしは杯中の蛇の影うつりしをみて杜

附録
舟船
のりき

宣おそれなくを飲さりしとありすも同
あるなりと紫芝園漫筆にも書あり又
司馬子楚靈王細腰を好むなりとあり
韓非子もこれを楚莊王と云ふなり列
女傳も云へる孟母の機を断る故なり
よく人の志あるもこれも後漢書河南
樂羊子妻の故事と大まかなり古書
の信しかりきことをおぼさるされ終
古事記神代紀の説のわきまありはあり
のしかり載のしきとあるは後の世に

つげしるのるれいことありきなり
すげ志くよまおしるは續紀の
比よまよひつる人の口よりあり
しるもまきし神代古書なり
いつ中にも續紀の比の信あり
ましりたれもをり志るしる

世々多つひ

くろつひに古書よりよくありとあり
たもまきしとされし強えいゆしが人と

をこしつり^意をこり^意るもしくつり^意はし
つをいさきつり^意を古言^意標^意らつり^意もの
者ハ大行^意のり^意のこる^意く^意とて^意に^意つり^意
也^意息^意行^意廢^意ら^意む^意と^意て^意に^意つり^意と^意書^意改^意
し^意る^意と^意して^意暗^意推^意の^意没^意を^意り^意か^意つ^意古^意書^意
に^意没^意を^意い^意は^意す^意一^意に^意没^意も^意る^意を^意い^意
る^意に^意没^意を^意い^意訓^意義^意を^意つ^意け^意し^意る^意と^意せ^意は
い^意ふ^意も^意い^意つ^意く^意よ^意こ^意る^意も^意也^意

後終^意子^意官^意人^意章^意蕙^意牛^意を^意な^意れ^意て^意廳^意の^意し^意ち^意
入^意て^意大^意理^意の^意社^意の^意を^意な^意れ^意の^意し^意ち^意の^意ほ^意り^意を^意い^意
お^意ろ^意と^意て^意所^意た^意り^意る^意を^意柳^意を^意怪^意矣^意なり^意と^意て^意
牛^意を^意位^意陽^意師^意の^意し^意ち^意つ^意つ^意す^意す^意と^意す^意一^意各^意
り^意る^意と^意す^意

か^意つ^意と^意こ^意の^意し^意ち^意わ^意以^意百^意結^意終^意卷^意四^意安^意和^意
二年九月十四日黄牛入外記廳経諸政所
即登築垣上東行落出太畢可謂奇
異也^意月書^意延久四年二月十日牛昇^意
原座喰損^意疊^意と^意あり^意文^意仁^意紀^意寶龜六年四

月乙三有狎狐飛于大納言藤原朝長裏名
朝座と志す也又日本紀畧壬辰大同四年
平城帝御宇
有犬登大極殿西樓上吠烏數百羣
翔其上とあり

廿三

いづのよ荒旱このそとて米のあふひの有り
如くは官より酒家より相付せし酒つくること
を減しきとあり
けり、いづのよあり類聚國史卷百七十
三災異部は九月壬子大同元年遣使減

左右京及山崎津難波津酒家饒ハ以氷
早成災穀米騰ハ糶也

あつひとのいそぐ 儒書ハ漢音にて讀
佛書ハ吳音ハ吳音にて讀
のりひるひる

考ふる志は佛書を吳音にてよむ
すしつこと 既天子の命あり

日本記畧云 桓武天皇延 辛丑敕明經之徒

不可習口音發聲 誦讀既致訛謬熟

習漢音と云へり これハ儒家の事なり

又類聚國史百八十七佛道部 延曆十二

丙子制自今以後年分度者 非白漢音

勿令得度す 同書卷百七十九 延曆二十

五年

不
愁池

辛卯宜華嚴業二人天台業二人律業

二人三論業二人法相業三人分業勸催

共令競學仍須各依本業疏讀法華

金光明二部經漢音及訓經論之中

云云若有習義殊高勿限漢音と云へ

てあつひ漢音りて書をよまんと

の詔あり 有りされと吳音熟し

あまやいす漢音をはたしぬ僧もあ

吳音をりて佛書ハよむべきなり

不
愁池

らんりのうは

大江戸東叡山のりありこみ池を不忍
の池とてあえううい語あり志のぞくすの
池ハすあもろ老のぶの池ありあをのて
をすといいつるなり茂睦翁の鳥の跡
といつ書いさくあるひよいよ志のを
すの池ハ志のふり園よつこころ池あり
あ老のふり池ありそれを志のをすといふ
をみやを父とすす父を母とすといふ
一丁をんれそふみやを不忍池といふ
らんりのうは

らん

美紫のきすらん月おはすもんこり
琉璃ハ紺の光ある色をれをらんり
うけりしあるいと今考るる上生
經よ慈氏髮相紺琉璃色とありす
名義集「琉璃此云青色寶言金翅
鳥之卵殼鬼神得之出賣與人名紺
瑠璃」といふ一人の一言中句も眼より
そすそらんをらん

四唐書天竺傳
有金剛似紫石
英石鍊不銷可
以切玉

湖月抄はたけりて説をいすすこみ相金の
の堅もなるす義林定六帖寶玉珍

いそぎ中ねをせり出湯んすま

このふりしあうせぬしこをある人の講談
の序をそこてありしやいと松ぼらうあく
松ぼらうありしといつりしはうらうら
れしやいと松ぼらうらうらこころあき
こはあしねとすませをりこころせうし
るまのつらひきまらりんりしやいと
今の倍酒さいつりひきし松ぼらうを
いそぎあはれりこころ源氏の生れ出のま
しうくたまりんといつりかを松ぼらう
松ぼらうあきうらせこのまをうらうら

あうせいと松ぼらうをせり出湯んすま
いそぎ中ねをせり出湯んすま
こころ松ぼらうこころありしやいと松ぼらう
つらまき物を別よあげこころも知し
日書よかくるいそぎそのまを松ぼらう
さし出せせいすれまきま松ぼらう
てすうしひろきあしひてそめさせて
いそぎこころありしやいと松ぼらう
いそぎこころありしやいと松ぼらう
くまきしひきまのこころありしやいと松ぼらう
ありすこころありしやいと松ぼらう

人の心もさうな物ぬひよやうな物なぞ
物なぞもさうな物ぬひよやうな物なぞ
いづつあつたさうな物ぬひよやうな物なぞ
むき人の心もさうな物ぬひよやうな物なぞ
き遠ところよりおの人の心もさうな物なぞ
てうさう封したるさうな物ぬひよやうな物なぞ
おくる心もさうな物ぬひよやうな物なぞ
げさうな物ぬひよやうな物なぞ
まゐるさうな物ぬひよやうな物なぞ

四十一
あまの心もさうな物ぬひよやうな物なぞ
いづつあつたさうな物ぬひよやうな物なぞ

いづつあつたさうな物ぬひよやうな物なぞ
いづつあつたさうな物ぬひよやうな物なぞ
いづつあつたさうな物ぬひよやうな物なぞ
いづつあつたさうな物ぬひよやうな物なぞ
いづつあつたさうな物ぬひよやうな物なぞ
いづつあつたさうな物ぬひよやうな物なぞ
いづつあつたさうな物ぬひよやうな物なぞ
いづつあつたさうな物ぬひよやうな物なぞ
いづつあつたさうな物ぬひよやうな物なぞ
いづつあつたさうな物ぬひよやうな物なぞ

四十二
四卷より余らうとしていづつあつたさうな物ぬひよやうな物なぞ

いづちもさるらふ事よ物もは何の人もさう
らうこゝもアんぢいとも

こゝれも亦つらふ事さるるなりこの上のみ
古今集離別歌よのせさる白女歌
下の白さるるつらふの事さるる
るなりすつ何の人もさるる
とい後撰恋一よよこ人さるる
あつた人のさるるせはるる
しとせむとある此下の事をそのまゝ
このあつた人の事さるるを
るして川流さるるこの細流お西三条公

條公稱多流とやあつたこのつらふ
る書あつたを三代集の歌をさるる
こすつらうといつたさるる
きいことさるる

花のえん

梅を花のえんといつた
山礬是は身梅是は足といつた
初さるる山礬は注し倍叫七里
香花とアんぢいとも

王安石

宋の王安石新法といふことを

その世の民をくろくしやうりしきれと
その世にわかれつらひ詩文集の
くひを物とせしめてつらひいなる
ることよりかゝる罪あり人のいふ
あはれものいやきういひてんきん
こそ道をこゝろむ人といひあはる
悪人のこゝろよりいふ書にらふ
ものをあらわしけしつらひは
しるしせしは佞人示の方人せしや
まれくちを師真の歌の気難
集よりいふるまはるるこゝろを
道志りし人のあはるるまはるる

四十四 教奇

好を教奇とい書し人の教奇とい俗し
いふふあををいふしあり李廣傳
顔師古曰命隻不耦合也とあり類書
纂要曰命運乖蹇曰教奇教命教
也奇單也偶偶也とありいよの茶
人の教奇屋るとかまそ風流なるま
のやういふるえさる文育よりこれ
るこゝろなり
わあひの巻よをいふしあはると

る事湖月抄に細流抄を引て云花をよといふ
宋朝に司馬相公といひ天子の洛中に入り州
ハををアんとすの自を割とくふと云ふ通鑑
といふ書にアとすり云云これおりの語を
ある事一は司馬相公あり一は司馬温公あり
る事お如い洋の代の人あり公の字を如の字を
ある事一は通鑑も宋朝通鑑をあり一
司馬光赴闕衛士以年加額曰此司馬相公也
雅望考る事花をよと司馬相公といふ
一はお公の書換あり一は細流抄
一は通鑑を引て辨せられしものなり

としそのあり細鑑を考る事元豊七年甲
子冬十二月端明殿文學士司馬光上資治
通鑑と云ふ事一はお公一は乙丑八年司馬光
自洛入臨夏五月詔求直言光居洛十五
年天下以為真宰相田夫野老皆號為
司馬相公嬪人女子亦知其為君實也及
入臨衛士望見皆以年加額曰此司馬相
公也所至民遮道聚觀と云ふ事一は此式
アリと云ふ物アリ一は一條院の長保實法
の比ある事一は名を述す事一は司馬公
を云ふ事一は衛士の自を割とくふ事一は宋の

元豊八年のころに物産つくり長保よりハ
百斗ハリ後のころに年序の前後ハ
きまなくちかくころハ河を引て書
の解をなすハありぬるの松尾も
むしあり

四六 節

いほの曆ハ冬のちをりをのせちえ
とちりせりいりハ四季よの終りい
とちりせりいりハ四季よの終りい
つとあり四月朔ニありいりこまて
ぬん書をもつりいりこまて
とありいりこまて

四七 あつきののちい

延喜式卷之七ハ大豆餅管十合小豆
餅管十合とありいほのまゝありあ
つきのちをりいり物もあつきの物と
ち

四八 俵

いほのよま米を一俵二俵をいりあり
きこち延喜式卷之一鳴雷神祭の條
榊一俵ハ春日神四座祭ハ榊二俵
外ハ不足しり但榊四把榊二十把

動しつゝに契仲の説のともをさねたり契
仲のさねた一巻を著し歌に古書をよぶひつ
もそのまゝなり
ついでにこの
解は契仲のむにんふれと著せしを
そそそそに古書ふんぬ歌よむねひて
よく解して古書を著るべし
ついでに古書もこの註家のつくりし
よあはれ中務集ふんぬる歌あり
岷江入楚ふに他者をも著しや
ついでに古書ありといふに古人を著せ
るにありといふあり書いひらくせ

松風の巻やしら山にさるる流るれりも
ららりるるをといふ新編といふに白や
のやしら山のたふすめはすまも物
そむらるるよ上の句をとりて大井の人を著
てさひしきをいかに著るされたり

考ふる白やのやしらついでに歌岷江
入楚入奥入す河海抄を引てのせらぬり
湖月抄は引歌ふすこみ歌古今集の
雑下これこの心かす白やの
ついでに白やの歌ありすあはすあはす

こそ者なりしをいふをあるはそやくらとい
 ふ詞はありせし強て川歌とせしとあるま
 抄にひき添ふるも多し一古劇翁の
 古今集の歌をたほんくらくらし例の
 口ありに似せる大なる強をいふ一
 川巻源氏の權の所院とよよりたまたまを
 此意の上のきくゆひて怨むひのあふよ一
 人のくらくらと志ぬさあは物一のくらくら
 つけれるをすらくれさるゆひひくをひきらく
 ろひの人といよくをむきを物もきくこのあふよ一
 いくわらひのくらくらと志ぬさあは物一のくらくらと

雅望考るる孟津抄の淡にぶるあふ
 ころちりり一きくくるとりく強をきく
 くのをよそよたあふり一あふんた
 のをすしをかんくのわくのふよりほらる
 なるり一志しよのあふん一なと志ぬよ
 ずとありうらな藏ひきく巻よしこふ
 詞ありかふあふよ一このあふよあふ

雅望考るる孟津抄の淡にぶるあふ
 ころちりり一きくくるとりく強をきく
 くのをよそよたあふり一あふんた
 のをすしをかんくのわくのふよりほらる
 なるり一志しよのあふん一なと志ぬよ
 ずとありうらな藏ひきく巻よしこふ
 詞ありかふあふよ一このあふよあふ

川歌こそわづれと好ひぬれと諸抄
にありしより一のみ此信明集をよむ
初て忘れりその
しつ例をうたへりし限なきわら
まことしきもくしんここのろを
めりしつちりりなるるさたを
此志の上をさしてをくありしつ
なりし孟津抄なりしは志剛のこを
一の巻に記せりハズるひくすして
諸抄なる此歌をいふ物なり式ア
は泉下は笑へるしきとちりや

しつやの書しひりりの帝のそよよこさ
まのしつれいてくるものらうしつれ
いつる下河海抄は堯湯冒洪水大旱之
責高宗成王有離雉迅風之變雖有小
異不失天徳とあり

この文は後漢書鄧皇后紀よりなり
責まの下而無咸熙假天下之美の九字
脱せりさそ歌の雖有小異不失天徳と
いつる九字は後漢書にやうなるを
らの解のよきこと人々よ河海の他志
の補てさしつるしつれを此れ外し

きのの巻よみたることありし註は後漢
 書鄭玄注を以て故以て後漢と
 志されし契仲の役の事なりし
 たりし注ありし一冊の人を以て
 なるく後の世の人まをわすむる
 かしこいするなりし

 此の後漢書といふは后皇
 紀を以て鄭玄注といふは后皇
 紀上禮記の鄭註を以てしるなり
 湖月抄は註を云ては後漢と云るなり

福さめのすさひ中之巻終

福さめのすさひ三

石川雅望輯

二十四孝

初瀬日記故事といふはりありし
 この國の童子教今川伏なると
 けしきくのりやあそぶ物と見ゆ
 書くは先は二十四孝をあらわし
 二十四孝といふは此國にもあり
 よりしをやらせ物なりしは
 のあつたる物ともいふす
 なしやつたりをりしむその中

古書よ又へさうとせしむ一はり刻と閃
と音ね迫く父母の眼をやめし度皮
をさへて矢下遭とすと甚し回故るな
いそましく此經文より出さるりのし
そん申 熊澤ひんを 佛法さしひんを
ありし二十回考の解しむりさるる
佛書の注釈をせらしとをさし
とやいそむ

すそくはな

眞字のりし仮字をそてかくをすそ
くすしそいあはるあひのあはるし

ニヤの詞すすそくはなをせすニヤの詞より
すそくはなをそあはるしとより善とすそ
ハニヤの詞をりそすそくはなをせす 惡し
といそニヤなるあすそくはなをそあはるし
といそニヤなるあはるしとよりあはるし
字ニヤなるあはるしとよりあはるし
詞ハニヤなるあはるしとよりあはるし
たすも續日本紀よりのおの宣命すし延
壽式の祝詞をりそをりそとよりあはるし
いぬるの一二をあはる

能久	廣支	畏岐	明可仁	美之	奉流	直岐	斬久	慰采
長久	喜之支	淨伎	好久	在留	平久	悲備	侍比	侍比
賜霸留	敢心美	麗岐	侍利	淨久	宜久	賜不	高久	賜比
是乃	坐須	恠備	奇久	明月伎	庶之岐	無久	悔備	談比
厚支	高支	喜備	此乃	賜麟流	貴岐	輕久	安久	此
求采	厚支	慈備	授氣	賜麟流	貴岐	為流	安久	此

此の人の名をわけてつくすはさうさうを此
 の人の名をわけてつくすはさうさうを此

齊く古くあるものかけるはさうさうを
 りたも古くを守るぬ書さぬは俗智
 のよおりの師といふのほつり
 まさきさうさうをかんちひてす
 じもさうさうをかんちひてす

こゝにさうさうの人のむしりより志らなる
 けりつるりかきつる物さあさ紙
 ささぬくのかさるむしひてこゝにさ
 ささる人はおろそかさをさうさうも
 ねぢりしむしひさう紙をわける

このおのりの代名

ありかきしやんをさうりすして字もあま
 人をさしてよきめいといひし李郡王
 言ふ楊名書生とあるなりをばりし
 河海抄の版上右直人の名も書し
 簡号日給簡を納む代名とし志す
 のひいハ大なる誤あるよし既にい
 せしにさしてこの代名を借しよ番
 代名なりと契申ししなりをたし
 たる沈文をひき今考ふるに月御所
 花屏巻のまかり一二月あり大將版

このおのりやうし書しよしやせし
 於てそのの奏せしそののえそあけし
 て以て沈すれそをこりハ唐錦を二
 きりてよきとせしとくけの如の集
 そのののりやうし書しよしやせし
 せよとののりやうし書しよしやせし
 てよむ例のものやあるもの講師の
 りにすししそをよよませ流そ思
 正しそをきよしし流しよしやせし
 けしそを流ししことんたすか
 上座ア版上人あり大將の御し
 せさるまよまありしそをかくて
 つくまうりくすしよのいお

神

前より経よむ

とありけ文よそよく志々々々々々
とありけ文よそよく志々々々々々
とありけ文よそよく志々々々々々
とありけ文よそよく志々々々々々
とありけ文よそよく志々々々々々
とありけ文よそよく志々々々々々
とありけ文よそよく志々々々々々
とありけ文よそよく志々々々々々
とありけ文よそよく志々々々々々
とありけ文よそよく志々々々々々

天平十三年閏三月甲戌奉八幡神宮秘錦
志らあゝぬこゝへ續日本紀卷之十四
りたもこれをとほさくればい
なくもいともなう志くして神あり
いゆのよみ祿手さるありの類ハ佛を
一頭金字最勝王經法華經各一部

度者十八人封戸馬五疋又令造三
重塔區實宿禰也とあり又三代
實録貞觀八年二月十曾度申神祇官
奏言肥後國阿蘇大神憤裁怒氣
由是可致疫癘擾講境兵勅國司
際齋至誠奉幣并轉讀金剛般若經
千卷般若心經萬卷太宰府司於城
山四王院轉讀金剛般若經三千卷般
若心經三萬卷以奉謝神心消袂兵
疫同書十六日壬戌勅遣十一僧向

於根津國住吉神社轉讀金剛般若
經三千卷般若心經三萬卷以奉
謝神心消伏兵疫同書貞觀八年
六月九日壬午令五畿七道奉齋
境內諸神兼轉讀金剛般若經昇
也同七月十六日戊午陰陽寮言天
下可憂水疫是以令五畿七道分畿中
國內諸神轉讀金剛般若經同書卷
之十四故律師靜安弟子東大寺僧
傳燈法師位賢護申牒言永和年

中靜安奏始修佛名懺悔之法使下分
天下專修此法賢護聊捨衣鉢換
以丹朱造二萬三千佛像八鋪高
一丈八尺廣一丈四尺請一鋪奉
納豐前國八幡大菩薩宮七鋪安
置北陸道諸國太政官處分依請
同書貞觀九年四月令豐後國鎮
謝火男火賣兩神兼轉讀大般若
經緣三池震動之恠也又類聚國
史延曆十三年三月戊寅遣十僧都
傳燈大法師位等定等於豐前國

ワカとく行をゆく一の巻めになす
松風老をなすひさしあはれは紙に
ほくくありもつらきついでありワカ
ハワカとくひなす一の巻めになす
のしあるこころは河海を引てワカハワカとか
くはせり又よきこころの美をいひ
くふあきこころのさみじけなす
ゆふもかへりけるワカハワカとく
とあはれは松風老のワカハワカとく
つこころありとくひはほのあけりもさみ

なすき物づくし書よあまもしとつは
せとくはあきこころのワカハワカと
かこころのつこころをさるるさ
いつくもつはのあはれは
あきこころをさるるさ
とくひありはあきこころをさるるさ
なすこころはあきこころをさるるさ
いふもやこころをさるるさ
つこころはあきこころをさるるさ
いふもやこころをさるるさ
なすこころはあきこころをさるるさ
いふもやこころをさるるさ

考ふるにみれ四糸所息正女の歌を後統
 新一よりありて三の白く身志まはありて
 浮移あり移を詠よかくて川まきり例
 のことなる我もよりのおまの人のこれ
 せもまことしるりしりてうらるる記し
 かしこまよしきつさるるまを
 いせお鏡むり男いしりしめいとをりけ
 なりしををんをうらうらつらにふがけな
 人へもみんかまの人をひすらんを
 それりしをんかかかーをうらうらまを

つらきことよのまきりらき物をおりし
 くらりな

今枚々々あり巻の巻よけいこらお鏡
 をうらうらしりしよきんをりしりし
 の人のむすえんとりひらるをえんいし
 おはすらんまよとわに即うての事こ
 さまにおまよかよに琴をりしりしを
 ありむをしるのまよに眼をるるりね
 よけしりしりしをうらうらしりしを
 いひするに首しりしりしりしりし
 をうらうらくたもよに琴をりしりし乃

その

おのり

又そのしりしり
 何よりけむすくは
 此外は知よかよ
 とらひて物をさ
 とくありて
 人の行はるるありし
 後集志四かけう
 きつれも少々の
 一四家持扱
 止水懐秋

新抄を載し
 新抄を載し
 新抄を載し

ついでに
 推本巻
 秘抄
 新抄

拾遺集
 拾遺集

わくしき子に年もしきすう物にうりぬ
人の後なりしをいしき子にうりぬ
の歌を川歌とすき物には下白未物
とうけりもけりよこいともなるさ

六 ついな きぬりて 権佛

ふくくハ十二月の終りしきすうつりせり
物にん申追難ハ國史をいれんハ十二月
晦日しきことしりぬハ即分よのいおこ
なよししきす権佛を内表より行を
るを推古の所時よりしきすうと公事

十七 玉 臣謬當其仁聊記

根原のしきすうハあまきし仁明の承和
七年四月清涼殿をいれり行を
たしきすう續日本後紀ハいれり
いれりしきすう人を仁といれり
儀之の儀多し文粹の大に匡衡の文よ
臣謬當其仁聊記

表記仁
者人也
道者義
也論語
井有仁
ふり
六

玉 あられとくさよ云りていえそのことよ

三代實録卷之十九藤原良房表文曰
隨身兵仗等雖舊貫不敢當其仁と
あり

と上り河をなつてけりあをさし河の頭より下り
てしりあをなしけり上りあを切て流す流を
たうてしりあをなすよりなるとしりあを

考ふるよ上の河なつてけりあをさし河を
たうてしりあをなすよりなるとしりあを
之三頁観元年十一月十九日庚午詔曰
二國乃國司等日夜無怠事久務給
利勤之久仕奉木依天治賜不又仕奉人
等中尔其仕奉伏乃隨治賜人毛在之云
同書卷之十三又善男掛畏岐山陵乃北
域乃内尔佛堂乎建天死屍乎埋世在止

申事在仍今令所司委曲勘定同書考
訊須留尔事既頭天更無可疑仍須善
男与利始天同書陵戸寺或畏罪天逃
退多利仍其身侍留限彼云云よりと
河をたうてしりあをなすよりなるとしりあを

十九

續江戶砂子巻し其は後拾まて山中のふいも
なほほとくきくもてしりあを切て流す流を
是は良遣法師のふて山塚大原の里勝林寺
の中は良遣の舊切り持りてしりあを切て流す流を
遣の事今にきんたより

考ふるは後拾まて集り良遣の郭との郭との
すくすく春下は三月つてしりあを切て流す流を

たぐをばつてよき所々中納之官取付
まはつたのひもなぬまをみるいこも
てや書きてつるも今の良選の取
向すくおやーと良選の取
取もすくー後珍を集ま
いこも

神儒佛三法者経解として書之に四十七言
詔告大已貴尊其靈曰柴普味譽彙務
奈夜古堵茂知爐羅年紫紀流度聞厨家
奴歟汗哆坡昫馬嘉有於依尔沙利泪轉
能摩敷惡世曾鋪列氣 先天神文言

人會道善命報名親兒倫元因心頭鍊忍
君主豐位臣私盜勿男田畠子女督績
織家饒榮理直照法守進惡攻絶谷我
刪 後天神文言とくき

い今の人を欺るむねを
妄言をつくるけしき
人ちを志す一古事記日本紀萬葉集す
一古書よいわ悪一の取
たし志すよこ文よいのち
や又依のまをせしを
依ハえの依

儀前薬師菩薩明神社としは者又同國
那賀郡酒列儀前薬師菩薩神社
と志す者り菩薩の神号ありはあはれし
されと大自在天神としは北野の所
神をのこしつと人たすはれと志すもりし
佛家の神号をそかれより此國の神へ
つたがふもせしなり大自在天神
としはと祖庭事苑と志すしとあり
たつ
たつ
いふたつはゆたつは今のうすゆり
といふたつはゆたつは今のうすゆり

三

物取よりうけくも今のことと草をあら
くあつたをたつてしとちつたはるは
むしとたつたあつた釋氏要覽僧祖云若在
道行得長具中置安衣裳中至本處當
敷而坐之は神をよまことといつむ
そのをいひ書はるは神をいひたつら
なりといつたやうなつたはるはあつた
やうなつたはるはいひとひつたはるは
まをいひ書はるは二日とありまを
あつたはるはあつたはるはあつたは
るはあつたはるはあつたはるはあつたは
るはあつたはるはあつたはるはあつたは

又かいらいなるの
ふのむしあつた
こまはあつたの故
あつたはるはあつた
あつたはるはあつた
あつたはるはあつた
あつたはるはあつた
あつたはるはあつた

うらぐらぐら^はをばいりのひまりの

善光寺の所佛

欽明帝十三年乙酉百濟の聖明王より初て
釋迦佛の像一軀幡蓋經論を獻せ
しは國を以て殺病行を止しは物部大連
尾輿中臣連鎌子、奏すは、^すすを有司は
おほきし佛像を難波堀江に流棄とあ
はれしを
釋迦佛なり今の善
光寺のなりは河彌陀なりなり

波堀江に佛像を棄すは、^すすあり
敏達帝十四年紀曰是時國行疫疾民
死者衆三月丁巳朔物部弓削守屋大
連與中臣勝海大夫奏曰何故不昔臣
言自考天皇及於陛下疫疾流行國民
可絕豈非^由由^我我^臣臣之興行佛法歟
詔曰灼然宜新佛法丙戌物部弓削守
屋大連自詣於寺踞坐胡床斫倒其塔
縱火燔之并燒佛像與^神殿既而取
所燒餘佛像令棄難波堀江とあり

新羅地に佛を奉け入ること上り
きしなりをト多ん地に佛を奉け
如之斗欽明十四年正月河内國泉郡茅
渚海よりそうえらる樟木をりて佛像二
軀をつくる今吉野寺に放火樟像なりと
有夫より敏達帝六年冬十一月百濟國王
付還使大別王獻經論若干卷并律師
禪師比丘尼呪禁師造佛工造寺工
六人遂安置難波大別王寺中十八年
冬十月新羅造枳叱政奈末進調并

送佛像さそり十三年九月從百濟末
鹿深臣有弥勒石像一軀佐伯連有
佛像一軀是歲蘇我馬子宿禰諸
其佛像二軀云云かくあれ今の若貴
寺の如乘とすゆら百濟の聖明王の
獻せし物とありけり敏達の時
百濟より來り佛つくりつる示れ又
ハ新羅より送つる物と佐伯連より
つれし像といふれりあれ欽明の時
つくりたる釋迦佛とありえ論なり其

後敏達の朝よりつらうまゝに佛ありく
木のたき

廿五 浅草寺のいづれ

聖護院道興准后の回國雜記とら
書よ浅草寺の所佛を十一面観音と
志す一より今をせぬよ正観音なる
をいふものあり志す一よりんさ
りしきほひある所とのつらうてお
るなれを并帳こそ志のひつら
とくつらよ此回國雜記を定後

作なりと志すかれり傳すをそくして印行せ
る物あり玉うつまといふ書よよ未だ傳
とそいふより之船信あり此書の片よ
老ぬすこ道まんかしたるをり
いられあゝむとよをせぬい准后の所
父の法名大通とすなり後知是院
白房嗣公のゆ事なりされハ一を文
かの在母持の老母なるをうその
ろよういふはれを志す一よりん
初は東山後室所殿よ此に
とかり又世はこやつらせぬよ上

其 かの國の古塚

ついでありて北なるの塔頭貞操軒とい
つる塔をえんて古塚のついでに
古塚をえ迎ふきつりあるとある宗社を
とし食の法師なりいへさるるをわむ
このあたりによるて宗社なりあるとい
とむきそ下よる舟の宗社別をさる
ついでに古塚のついでにわむ

山梨郡國山村の御年よ塚あり在
原塚とよほ折のふより南へ四五

其 大江千里

町をうりゆく古塚ありこれに在原志を
船長のをきつきここのあその船のついで
のゆきいふちをわむひつとよこのひ
はつてよその事なりといかの國の人か
この名、貞観八年大枝姓を改て大江と
稱えんとる者人々の表文をられし
然則一門荒樹不鳴柯而永春千里
大江不辭海而無盡とわむ
なりきまふなり

其 大江

名
厩

大系圖より大正氏の祖を阿保親王
より川上といふはよきとあるは
より土師の姓より出せ菅原大枝と
ありありはつたこと今の人には
よくも志りたるはゆきのことあるをくち
くぬとあり

太平清話よりいらく馬二百一十六匹を
一閑とす天子は十二閑計二百
六十匹なりしとあり今梅中より是ハ
二千五百九十二匹を誤りしとありや

但しこれよりいれ周禮夏官校人
天子十有二閑註每厩為一閑左
傳成十八年註每厩為一閑閑有
二百一十六匹とあるもいふく天子
諸侯の馬を養ふよとのむびし
を志す

